



月報

2

缶詰問屋

(43.2.29.No.14 Vol.2)

◇ 目次 ◇

2月の行事一覧表	1
◇(第7回)果実部会	2
◇(第3回)農産缶工組との懇談会	5
◇(第6回)蔬菜部会	11
◇中部地区缶詰懇談会	14
◇西部地区缶詰懇談会	17
◇東部地区缶詰懇談会	19
◇缶詰全国大会開催要綱	23
◇肉表示に関する打合会	23
関連産業	28
会員消息	29

全国缶詰問屋協会

Japan Canned Food Wholesalers Association

東京都中央区日本橋通3丁目8番地

八重洲通ビル7階

電話 東京(273)9289番

2 月 の 行 事 一 覧 表

行 事	月 日	時 間	場 所	出 席
中部地区笹岳誌懇談会	2月 5日	15.00～ 17.00時	名古屋ホテル	間屋 J 4名
西部地区笹岳誌懇談会	2月 6日	14.00～ 17.00時	大阪化繊会館	間屋 メーカー 青果 25名
東部地区笹岳誌懇談会	2月 9日	14.00～ 16.00時	朝北洋商会	間屋 青果 メーカー 35名
(第7回)果実部会	2月13日	11.00～ 14.00時	朝北洋商会	22名
農産缶工組との桃懇談会	2月13日	14.30～ 16.30時	丸ビル精養軒	全缶協 21名 農産缶組 J 5名
肉表示に関する打合せ	2月14日	10.00～ 12.00時	日 缶 協	全缶協 4名 食肉工組 6名 日缶協 1名 製缶協 1名
(第6回)蔬菜部会	2月19日	13.30～ 16.00時	朝北洋商会	18名

3 月 の 行 事 予 定

笹岳誌代表者懇談会 全缶協側事前打合せ会	3月 6日	11.00～ 13.00時	名古屋ホテル	7名
代表者懇談会	3月 6日	13.30～ 15.30時	"	メーカー側 13名
笹岳誌全国大会	3月 7日	13.00～	名鉄 グランド ホ テ ル	

(第7回) 果 実 部 会

- 日 時 昭和43年2月13日 11:00～14:00時
- 場 所 (株)北洋商会 7階会議室
- 議 案 (1) 新物みかん缶詰に関する件
(2) 日本農産缶詰工業組合との桃懇談会に関する件
(3) その他
- 出 席 22名

※ 部 会 討 議 の 概 要

この果実部会ではいよいよ終盤にはいつたみかん缶詰に関し慎重な審議を行ない、次いで午後から日本農産缶詰組との桃懇談会にのぞむための意見統一を行なった。

1 みかん缶詰生産予想

関係筋の資料および各地区部会員の報告にもとづき本部会で最終的な予想として集計したものであるが、前回の果実部会では600万函以上の生産になれば昨年同様の混乱を招くことになりかねず大いに警戒を要するという見方から問屋、パッカーが一体となつて600万函以内に抑えるべく努力しようという話し合いがなされたがその後2月5日頃からの原料事情の急変により700万函というような多量生産の心配はなくなつたもののまだ安心するには少し早いという考え方である。12月末までの生産は230～240万函と見られ、年末から1月中は原料も潤沢で各工場はフル稼働を行ない、昨年以上のペースで生産され、したがつて1月中は190～200万函を生産、合計430～450万函には達したと見られる。2月は10日迄に100万函程度、その後にてき

てくる数がポイントとなるが3月の生産も1月で原料が切れた年でも20万単位はできており、ことしも少くともその位はできるのではないかという見方もあつた、したがつてことしの生産量は600万函にプラスアルファ—20~30万単位で終るのではないかとの意見が強く、なかには600万函以内との見方をするものも一部にあつた。ブロークンについてはことしは早魃の影響で九州地区の原料はブロークンの発生率も多く一部には2割位といわれており、輸向、内販とも減産したにもかかわらず昨年以上との見方で140~150万函との推定である。

2 みかん缶詰市況について

例年のみかん缶詰の荷動きは12月末までには200~300万単位のものが消化され年明けから4月頃には相場も上向きサイズ物も引合つていたが、ことしは自然にうまれた売り方となつており、積極的な売り込みには出ていない。従つて本年は先ずブロークンを先行し、それを8月末頃までに消化し、次いでサイズ物に移行するのが望ましいという考え方である。

そうなれば自然にサイズものの値もでてくるという見方である。

すなわちブロークンをまず消化してしまふという売り方に立ちこで無理してサイズ物の相場をだすことはないとの意見であつた。

しかし現在の動きはブロークンも冴えず28.50銭で買つても29円売りが一杯といわれ、サイズ物はいまのところ全く動かず31~32円では買い気なしとの声も聞かれた。

3 みかん缶詰についてその他の意見

いま600万単位のものであるが将来は1,000万函にも達することになる。こうした時にひとりみかん缶ばかりでなく桃缶もそうだがヒネ物を残さないということが大切である。その年に生産されたものはその年に売るといふことが

原則となる。しかしある部会員の意見ではみかん缶詰は必ず持越さなくてはならず、難かしい商品であり、一つの方法として新物のみかん缶詰は2月1日から一斉に売り出すといった処置がとれないものか、例えば限月極め仕切という方法でもとれば業界全体の利益になると思うがとの意見がだされた。

これに対しては資金的な面で現状では無理ということであつた。

また、印刷缶でなく白缶にしたらとの声もあつたがいまは印刷缶の方が安いということで特に問題とされなかつた。またバッテリーとの仕切値を時期によつて3段階位に仕切ることばできないかという意見も出た。いずれにしてもそれぞれの事情によつてことなるか持越しを含めた価格で一本に仕切るという方法も一つの考え方であり、興味ある意見が出された。

4 桃缶詰生産推定

部会員の中から次の数字が示されたが、これは確定的なものではなく、あくまで推定された数字として伝えられた。

		白 桃 缶	黄 桃 缶
東	北	1 9 7 万 函	8 0 万 函
関 東	甲 信 越	8 3 万 函	8 万 函
静	岡	1 0 0 万 函	1 0 万 函
関	西	4 6 万 函	4 万 函
		3 7 6 万 函	5 2 万 函

合計 4 2 8 万 函 (うち輸出向に 1 4 ~ 1 5 万 函 程 度)

5 桃缶の市況について

出来秋安値生まれのためスタートから好調な荷動きを見せた。相場は4号併用2ツ割りで年内仲間卸52円年明け53円位になつたが問屋は出来秋に売りにてたため後半になつて払底した。しかし実際には手マークの段階では値上

りせず、仲間のやりとりで値上りしている状況である。

ただしその数もわずかな量であり値上りしているとはいっても大勢には影響はない。昨年は減産であつたが5号缶の生産は例年より多く、そのため5号缶は軟調である。特に四ツ割は人気 冴えずまだ在庫されている。なお総体的な流通在庫は現時点において160～170万函程度と見られるが、製造時期には完全消化ができるものと見られる。いずれにしてもことしは4号缶がみかん缶に比べ安かつたので早く消化し5号缶はみかん缶より割値であつたというのが実情である。

農産缶工組との桃懇談会

(第3回)

日 時 昭和43年2月13日 14.30～16.30時

場 所 丸ビル精養軒(丸ビル9階)

議 題 (1) 桃缶詰の市況に関する件

(2) 桃原料対策に関する件

(3) その他

主 催 日本農産缶詰工業組合

出 席 全缶協正副会長、果実部会長、他部会員21名

日本農産缶工組、理事長、他桃原料対策委員15名

※ 懇談会の概要

この懇談会は昨年8月17日(第1回)、9月18日(第2回)に引き続き、おもに桃原料対策を中心に生販両者の意見を出しあつた。

日本農産缶工組との第2回目(第2回)の会合において全缶協から、原料対策について特約

農家と3年間位の長期契約栽培をやつてはどうか、4号併用小売60円の線から見て原料を例えばキロ25円位で安定させるようにしてはとの提案に対して、日本農産缶工組では、それけよい考えであるが原料のキロ25円は無理で1級工場着値キロ30円なら農家も承知し採算ベースにのるのではないかと意見であり、前回の懇談会は一応そこまでで中断していたが、日本農産缶工組の要請により、あらためてこの問題を中心とする懇談会となつたものである。



小泉理事長 今年の桃缶詰は全缶協のお骨折りで安定のきざしが見えて来た。こうした会合を昨年2回行ないその後11月にとの話がまつたが、私の方から日をずらしたことは申しわけない。商品を買つていただくみなさんの方が指導力があり、ことしも相談しながら上手に売つていきたい。桃の原料価格は3年週期であり、昨年はキロ20円以下になつた。これでは農家はついでこなくなる。そんな訳で私はことしの意欲を心配しておりなんとかもう少し安定したかたちでやつていきたいと考えている。

浅井会長 全缶協が発足してから各部会で需要と供給量の調整につとめ業界全体を安定化の方向にもつてゆくことに努力し、昨年度は一応の成果をあげてきた。さて桃缶詰の全体の状況としてはことしも容易ではなく、こうした会合を持つてメーカーと密接な連絡をとりながら仕事の上でよい結果がでるようお願いしたい。

1 桃缶詰の市況について

全缶協から大要次のように説明された。桃缶の生産は38年頃から400万函台となり、1昨年は500万函の大台で昨年当初の予想では原料豊作で増産されるとの見方だつたが東北地区の台風による水害の影響、人手不足が原因し、

原料を多量に腐らせ、これによる減産が50万函以上と見込まれ、結局428万函位に落ち着いたようである。これからは先ず桃缶の生産量は500万函位のものはできると見なくては行けない。その数を売っていくためには安定した生れ値が期待され、出来秋相場が消費価格の限度を越すと、持越すことになる。従つて正常な利潤をみるとして末端4号缶併用小売60円の総が生産量500万函を水準とした場合、妥当な値頃ではないか。

ことしは原料がよくなかつたため、4号缶が予想以上に少なく、5号併用は逆に1昨年位のものでき、特に4ツ割が多く出来秋31~32円でスタートしたが4号缶の売れ足ほどにはよくなかつた。

桃缶詰の安定ということは大巾な相場の上昇を望むものではない。現在一部2次店クラスで非常に強く売っているがその対象となるものは量的には少ない。一次店クラスでは当初の増産予想から出来秋に大方の物は売つてしまつている。ことし好調であつた原因は、スタートが安値生れのため喰いつきがよかつたこと、特に4号缶はみかん缶に比べ割安であつたこと、逆に5号缶はみかん缶の方が安く、売残り残つた。現在の在庫の推定は5号缶を中心に170万函程度が2次、小売店段階で残つている。

2 桃原料対策について

日本農産缶工組から大要次のような意見がだされた。

桃原料価格は8年週期で巡つてくるが、不安定な状況が続いており、昨年はキロ20円であつた。このことからことしはキロ50円だと福島農家の間でいつているところがあるがそれは別として、昨年のようにキロ20円では農家の栽培意欲がなくなり、木を切るといつたところもでてこよう。こうしたことを数年くり返せば桃の原料は半分になるおそれがあり、現に原料の生産は頭打ちになつている。そこで問題になるのは昨年4号併用小売60円であつたのに対しもう少し高値を希望したく全缶協の協力を得て農家も安心して栽培できるよう

善処したい。ことしまたりはもうその時期にきており、キロ80円位にはする必要があるのでないかと思う。現在農家はことしの桃について不安を持っており、それを今から伝えれば安心すると思う。みかんと違い桃の原料は生には回せず、それなりの原価計算があり、缶詰原料のみに頼らなければならない。最近の指導は生市場向けに力を入れはじめており、この辺で原料向の安定した基準を設けなくてはいけないのではないか。農家も余り高いことは希望しておらず、よい物は大体原価計算でキロ産地にもよるが特に高値を主張する地区は28円につくともいつている。



以上、特に結論がでずに懇談会は終了したがこん後もこうした会合を開きながら生販両面の連絡を密にして桃缶詰を安定の方向に持つていこうということであった。

表 1 桃に関する資料

年次	栽培面積 (ha)	収穫量 (トン)			缶詰生産量 (千箱)			缶詰用原料所要量 (トン)					
		白桃	黄桃	計	丸		小計	大		白桃	黄桃	計	
					白桃	黄桃		白桃	黄桃				
昭和38年	20,730	186,900	11,700	198,600	2,339	423	2,762	205	104	309	66,263	11,509	77,800
昭和39年	21,000	192,000	14,600	206,600	1,897	596	2,493	86	67	153	51,700	14,500	66,200
昭和40年	21,000	211,500	17,200	228,700	2,101	537	2,638	138	89	228	58,300	13,700	72,000
昭和41年	21,400	244,500	19,300	263,800	2,324	517	2,841	502	165	667	64,100	13,700	77,800
昭和42年	21,600	265,300	19,600	284,800	2,000	500	2,500				57,000	13,500	70,500

注 缶詰生産量は日本缶詰協会調査の標準箱換算によつた。(標準箱 1箱=450g×48缶(21.6kg))

出所：1. 栽培面積、収穫量は農林省作物統計

2. 缶詰生産量は缶詰時報統計特集号(42年は推測)

3. 缶詰用原料所要量は農林省農業観測用資料(42年は推測)

表 2 原料価格の推移

	白			桃			黄			桃
	40年産	41年産	42年産	40年産	41年産	42年産	40年産	41年産	42年産	42年産
全岩宮秋山榎橋千山長岐勢愛三和嵯岡広徳香愛長	411	466	255	366	482	266				
国手城田彩島木葉梨野阜岡知重山取山島島川媛崎	444	488	177	300	482	177				
	444	444	191	395	481	233				
	444	444	121	455	619	233				
	444	444	177	366	499	199				
	444	444	202	377	499	266				
	444	444	207	388	555	266				
	444	444	272	388	611	333				
	444	444	277	388	611	333				
	444	444	313	388	611	333				
	444	444	317	388	611	333				
	444	444	373	388	611	333				
	444	444	383	388	611	333				
	444	444	400	388	611	333				
	444	444	474	388	611	333				
	444	444	500	388	611	333				
	444	444	509	388	611	333				
	444	444	522	388	611	333				
	444	444	529	388	611	333				
	444	444	544	388	611	333				
	444	444	566	388	611	333				
	444	444	634	388	611	333				
	444	444	666	388	611	333				
	444	444	688	388	611	333				

昭和42年度青果物加工品生産流通事情調査より(工場引取価格)

(第6回) 蔬 菜 部 会

日 時 昭和43年2月19日 13.30～16.00時

場 所 株北洋商会 7階会議室

議 題 1. 地区別筍缶詰懇談会の経過報告

(イ) 中部懇談会

(ロ) 西部懇談会

(ハ) 東部懇談会

2. 新物筍缶詰に関する件

3. 筍缶詰全国大会に関する件

4. その他

出席者 18名

※ 部 会 討 議 の 概 要

この蔬菜部会では2月5日中部、2月6日西部、2月9日東部の各地区で筍缶詰の地区別懇談会を開き話し合いを行なつたがその総合的なまとめとして本部会で検討し、3月6日に名古屋ホテルで開催の日缶協筍缶詰委員会及び各地区パツカ一代表と全缶協正副会長、正副蔬菜部会長によるトップ会談、翌7日の日缶協の筍缶詰全国大会に臨む態度を確認した。

1 中部、西部、東部懇談会の経過報告

それぞれの地区で筍缶詰の市況、新物筍缶詰に対する貴重な意見がでたが総合的に見て3地区ともほぼ同じ見解であつた。すなわち去年の筍缶詰は順調に売れたがA、B級のS、Tといつたこまかいものが売れ残り、その原因は価格がス

ソ物に比べ割高であつたからという見方がなされた。

反面、スソ物は前年かなりの持越しがあつたにもかかわらず、価格が安かつたために好調だつた。昨年がよかつただけに、ことしは問屋、メーカーもかなりの意欲を持つており、このため原料高、製品高といった懸念が強く、ようやく昨年軌道に乗つた筍缶詰をまた不安定な商品に戻すといつたことのないよう、ことしは生販両面で慎重を要する年という結論で、早積みを慎しみ、①早期生産を行なわない。②原料を適正価格で購入する。③製品値が極端に高くないよう消費者が要求する小売100g 20～30円売りができるように抑えたいという大方の意見であつた。また品質についても昨年はほとんどクレームがなかつたが、ことしは量産で品質低下の恐れもあり、選別は特に厳重にされたいとの意見がだされた。(その他については別項、中部・西部、東部懇談会を参照のこと。)

2 10進法及び規格の問題

昨年、全任協では筍缶詰の10進法による規格の改正案を日任協筍缶詰委員会に申し入れていたが、その後山崎委員長から原料が地区によつてかなりの差があり採用することはできないとの回答があつた。10進法についてはこの部会で諮つたところ、ことしはふれないということになつた。變つて日任協から提案があつた「傷」「折」の規格を一本にするという案には反対との結論である。その理由は販売上、「折」と「傷」とは根本的に違いがあり、実際には100～150円落ちでなければ売れない。パツカーでは先の折れた程度は傷にしてゐるがこれは困るとの意見が強かつたため。

3 新物筍缶詰に関する件

3地区の懇談会でも意見がだされたが、ことしの新物筍缶詰について昨年は順調だつただけに逆に慎重を要する年であり、互いに犠牲のないよう慎重ムード

で進み、早積みを慎むということに一致した。作柄予想についてはまだ時期が早いので確かな予想はたたないが、九州地区は早熟後の湿りにより、若干持ちなおしたといわれる。徳島は今年の1.5～2割減産、その他の地区ではだいたい平年作との推定であったが、生産意欲は旺盛で増産気配が濃厚のため、原料高、高値うまれを警戒するといった空気が強かった。早積みの必要はないとの部会での結論であるがその理由として、①1級のS・Tを中心に高値のものがまだ相当に残っており、結構売るだけの玉を持つており、スタートが高値であれば模様を眺めすぐに手配する必要はない。②台湾産筍缶が年々固定客を掘り伸びており、内地の相場いかによつては多量に入荷のおそれがある。

生産能力も5G缶50万缶位は可能といわれる。また製造時期も長く内地に比べ時期的に遅いため、内地の様子を見ながら日本の規格に合わせ造れるという利点があり品質もよくなつていいる。輸入価格は2ドル50セントだがもつと下げられることも可能であり、1,000円前後でできるという見方もある。

従つて内地が余りに高値で消費者価格にマッチしなければ台湾の安値物にくわれるといつたことも十分考えられる。

以上のような理由からパツカーに対しては高値原料を買わないよう警告すべきだとの声も強かつた。部会では新物筍缶詰に対する希望価格といつたことも検討されたがまだ時期的に早く結論を出さず3月末～4月初旬頃の野菜部会へ見送ることになつた。

4 筍缶詰全国大会について

8月7日名鉄グランドホテルで開かれる日缶協主催の「筍缶詰全国大会」には全缶協野菜部会員はできるだけ多くの人に参加するよう申し合わせ、同時に会員外の筍缶詰扱い問屋、青果関係者などを含め91社に全缶協事務局から日缶協、筍缶詰全国大会事務局宛のハガキを同封し案内状を送付した。

また大会前日には、次の要領により代表者会談を開くことになつた。

全 伍 協 働 事 前 打 合 せ 会

日 時 昭和43年3月6日 11.00～13.00時
 (12.00～12.30時昼食)

場 所 名古屋ホテル (TEL) 231～6366番
 名古屋市中区錦 1丁目18番34号

議 題 1. 新物筍缶詰に関する代表者懇談会事前打合せの件

出席者 正副会長、正副蔬菜部会長

新 物 筍 缶 詰 に 関 する 代 表 者 懇 談 会

日 時 昭和43年3月6日 13.30～15.30時

場 所 名古屋ホテル

議 題 1. 新物筍缶詰に関する件
 2. その他

主 催 全国缶詰問屋協会

案内先 日本缶詰協会筍缶詰委員会 委員長ほか

中 部 地 区 筍 缶 詰 懇 談 会

日 時 昭和43年2月5日 15.00～17.00時

場 所 名古屋ホテル 2階会場

議 題 1. 昨年度筍缶詰に関する件
 2. 新物筍缶詰に関する件
 3. その他

主 催 全伍協蔬菜部会

出席 全国缶詰問屋協会 副会長(代) 中山良助氏 ほか13名。

※ 懇談会の概要

大橋蔬菜部会長は中部地区懇談会の開催に当たり大要次のように挨拶した。

「40年、41年度の缶詰は全く苦しい立場に追い込まれたが、昨年のいまごろ、各関係業者の方々に寄つていただきよりよい対策を講ずることにより昨年の缶詰は適正数量、適正な価格で出発することができた。例年だと7～8月ごろは荷動きの低下を見るのが普通であるが、価格が値頃であつたため順調な引合いが進み年末には一部品ガスの商状を示した。ことしは前年のキャリオーバーを含め一応消化され、新物出回り時期までにはゼロから出発ができるのではないかと考えられる。従つていままでの状況から見て近来にない好ましい在庫状況ではないかと思う。

しかしその反面、ことしの新物缶詰は各パツカーとも増産意欲を持つているだけに前々年度と同じ結果を来す憂いも多分にあり大いに警戒を要する。本日は缶詰を専門にお扱いの問屋の方、青果業者の方にお集まり願つたが、卒直に意見をうけたまわり、たとえば1級のT、TT級がなぜ残つたか、スツものに対する価格差はどうか、など積極的にお聞かせ願いたい。

本日の懇談会につき6日は西部地区、9日は東部地区の懇談会を開催し、そのうえで蔬菜部会を開き、3月7日の当地における缶詰全国大会のその前日、代表者間の意見をまとめ、全国大会で原料生産者、パツカーにお伝えしたい考えである。」

なおこの懇談会は副部会長の北村伝司氏が座長となり議事を進行。

〔消費状況〕

1. 総体的に昨年は安値であつたので荷動き好調であり、特に3級品がよく売れ

た。しかし1級、2級のTが残っている。

2. 3級品のこまかいものは殆んど消化したが3級のMサイズが残っている。

〔中部地区の5G缶末端相場〕—単位1缶円—安値～高値

	A	B	C
L L	1,450～		1,500～1,600
L	2,000～2,300	1,800～2,100	1,600～1,700
M	2,400～2,600	2,200～2,400	1,700～1,800
S	2,700～2,800	2,400～2,600	1,800～2,000
S S	2,800～2,900	2,600～2,700	1,900～2,100
T	2,800～2,900	2,600～2,700	

〔原料・生産見通し〕

全般的に見て昨年の横バイ。しかし現状では見通し困難。

なお缶詰の生産見通しは野放しとするか、それとなくセーブするムードをつくるかで違ってくるが、ある見方によると原料作柄が平年作であるとするならば昨年以上の生産となろうとするものもあつた。

〔42年度九州某工場の製品出来高比率〕

	A	B	C	こみ
L L	1.3%	7.6%	6.1%	15%
L	3.0%	7.0%	5.0%	15%
M	4.0%	4.7%	3.3%	12%
S	3.0%	2.0%	1.0%	6%
S S	1.5%	0.8%	0.7%	3%

T	1.5%	0.3%	0.2%	2%
T T	1.0%	0.4%	0.1%	1.5%
割	6.8%	10.1%	5.1%	22.0%
合計	22.1%	32.9%	21.5%	76.5%
格 外 (23.5%)	傷2%、折れ2%、筒6%、元11%、その他2.5%			

[その他]

※ 中部地区としてはS S、Tは段階を設けず同一であるとの考えに立つことを希望する。

西部地区筍缶詰懇談会

日 時 昭和43年2月6日 1400～1700時

場 所 大阪化繊会館 1階2号室

議 題 1. 昨年度筍缶詰に関する件
2. 新物筍缶詰に関する件
3. その他

主 催 全缶協蔬菜部会

出 席 全国缶詰問屋協会 副会長(代) 中山良助氏 ほか24名。

※ 西部地区懇談会の概要

前日の中部地区懇談会と同様全缶協副会長(代)中山良助氏、蔬菜部会長大橋庄三郎

氏の挨拶があり、座長宮軒治兵衛氏により懇談会が進められた。

メーカー側からはこのほど近畿缶詰製造協議会の会長に就任した紀州食品株式会社社長堀口晃氏ならびに同協議会の筍部会長中村春太郎氏（中利缶詰株）の挨拶があつた。

〔作 柄〕

中村春太郎氏の説明によると1月29日会合を開き検討した結果では昨年が早魃であつたとはいえ平年作ではないかとの見方が圧倒的だつたといわれる。

しかし地域的には前年比10～5%の減が考えられるとも説明していた。

なお徳島青果連の日浅貞雄氏は早魃を理由に昨年の平年作に比較し最高で7割どまりとの見方をしていた。

〔原料価格〕

原料生産者がどんな考え方をもっているかが問題であるが、昨年の経過から見てもつと高く売ることができたのではないかとの感じを抱いている向きもあるようである。特に徳島地区は筍で生計を保っているものが多く、価格には敏感でありそれだけに本年はむずかしいとの意見があつた。なお徳島地区の反収は最高260貫、平均150貫であり、その粗収入は2万円といわれる。

〔市 況〕

バラ売りでは2級、3級のL、LLが人気があり、荷動きの対案は3級が圧倒的であつた。価格指定が8割を占め、サイズ指定はあまり強調されなかつたという。

市販のバラ売りと4号缶の丸缶価格は目方のうえから見ても同値位になつているが4号缶の引合いは振わない。これなど贈答用などを考慮し大いにPRする必要があるとの声もきかれた。

〔 在 庫 〕

1級、2級のT、TTが残っている。これは昨年の価格をSSとTは同一との考え方であつたが実際はSSよりTの方が高値の相場が出たことが残つた一因であるともいわれている。在庫については順調に消化はしているとはいふもののまだキャリオーバーがなくつたとするのは尚早ではないかという意見もある。なおTサイズについては近畿地区は九州地区と異なりTサイズが多いので價格的にも考慮ありたいとの希望であつた。

また昨年はスソものが売れ、上物が不揃だつたが、毎年こうしたことを繰返しているといつまでたつても安定した織は出ない。

逆にスソものが人気があるということを全国的に宣伝されると案外スソものが高くつくことになりかねないとの声あり。

〔 そ の 他 〕

1. 中村氏の発言で筍の基底の部分のメン取りを省きコストダウンを図りたいが、販売側の意見はどうかとの質問があつた。
2. 東岳の登坂氏より外面ラッカー仕の件につき質問。本年から全面的に励行することを問屋側は要請した。
3. その他D級の存廃問題、10進法の採用問題など積極的な意見の交換を行なつた。

東 部 地 区 筍 缶 詰 懇 談 会

日 時 昭和48年2月9日 14.00～16.00時
場 所 (株)北洋商会 7階会議室
議 題 1. 昨年度筍缶詰に関する件

議 題	2. 新物筍缶詰に関する件 3. その他
主 催	全任協蔬菜部会
出席者	全国缶詰問屋協会 会長 浅井二郎氏 ほか34名

※ 東部地区筍缶詰懇談会の概要

東部地区蔬菜部会員及び関係問屋、製造、青果関係者など29社35名の多数の参加を得熱心な討議を行なった。先ず浅井会長の挨拶に引続き中山副会長(代)の中部、西部地区懇談会の経過報告の後、萩原蔬菜部会副部会長が座長となり討議進行した。

〔 会 長 挨 拶 〕

「本日は全任協蔬菜部会主催の東部地区の筍缶詰懇談会を開き、関係団体、青果関係者と筍の現状について懇談することになったが、昨年も同様にこうした懇談を名古屋、大阪、東京と3地区で開催した結果、昨年度は極めて順調に推移し、ことしの生産期には在庫一掃という状況となつた。筍ばかりではなく缶詰は従来の実績から見て3年ごとの周期がありよい年の翌年は原料高の製品高に加えて過剰生産しその結果常に販売業者が苦境に立たされているが、全任協が41年11月に創立して以来こうした問題点について取り組み正常化を図つてきた。昨年の筍缶詰はよい結果で終了し、新物を迎えることとなつたがこの席からみなさまのご協力に対しお礼を申しあげたい。ことしはよい環境にあるがそれだけ難かしい年と思う。みなさんの卒直なご意見を聞き、新物筍缶詰に対して慎重な態度でのぞみたい。」

〔 中山副会長(代)の挨拶 〕

「2月5日名古屋で開催の中部地区筍缶詰懇談会の出席は14名であり、すべて大卸

クラスの間屋であつた。また大阪は2月6日にバツカーおよび製缶筋6社計25名の出席であつた。

大体この両地区懇談会で一つの線が出たわけだが、さらに東部で懇談したうえでその結果を全缶協野菜部会に諮り笹缶詰全国大会にのぞむという段取りとなつている。」

[42年度，笹缶詰の動向]

荷動好調の原因は製品価格が安値であつたことにつきる。40年を100とすると裾物は57、したがつて半値位であり裾物はよく売れた。上物は75位であり裾物に比べ割高で特にA級のTが相当残つている。これは上物が多く生産されたということではなく残つた原因は価格が高かつたということである。

しかしL、LL級は野菜高や、生の缶が集中的に出て安かつたことその他いろいろ好条件が重なつて売れ足を一層よくした。

[新物笹缶詰の動向]

1. 昨年の笹缶が好調だつただけに新物については生産者が製品選別を粗雑にする恐れがあるうえにことしは雨が少ないので固い缶が多いと予想され、鮮度落ちや、選別不良のなきよう品質の向上については特に留意したいとの強い要請があつた。
2. 昨年は笹缶がよく売れた年であるがしかしSS、Tは裾物に比し価格差が開きすぎており割高のために残つており値下げする必要があるとの声があつた。SS、TクラスとなるとM級よりも市場性がなく現在消費の要求するものはL級が多く20本～30本代が一番売りよい。また100g小売価格も5円～10円の違いで消費の回転率が違い安く多く売るといふ方向が望ましいとの意見があつた。

以上のような状況により特にこまかい原料は市場性がないためメーカーに高く買わないよう、又農協を牽制する意味で半値位だということを強調したらとの声が聞かれた。

実際に生市場ではこまかいものは格安に売られており規格もあまりきびしくする必要はないがL、M級の規格は厳重にすべきだとの意見があつた。

〔新物価格〕

1. 新物筍缶の価格は2月19日の蔬菜部会で意見統一し、日缶協管委員会の幹部とあつて煮詰めていく方針である。生産も平年作と見て2000~2100万缶できると見られるので価格もその辺を十分検討する必要がある。
2. 今年は特に原料を吊り上げないことが肝要で、問屋側の早積み要請が一番危険であり互いに慎重にのぞみたいということで全員の意見が一致した。
3. ことしは生産地はみかん缶詰その他が悪く筍にしわよせされると考えられ若干の値上りは止むを得ないとしても、値上げは直接消費に響くので今後は消費価格から逆算して価格検討すべきだとの意見あり。

〔荷造り方法〕 一荷造様式は井桁に側面結び一

荷造りであるが縄は錆缶を生じさせたり、又運搬などにおいて膨張缶の原因となることが多いので、温泉青果で使用しているような上下をグラスファイバーにし上を丸く打抜いた段ボールにすれば打検もできるし合理的との意見があり研究課題とすることになった。

以上が東部地区懇談会の概要であるがその結論は

- ① 品質の面で選別を厳重にする。
- ② 早積みを慎しむ。
- ③ 上物、裾物、その他価格差の検討。
- ④ 荷造りの問題を研究課題とする

以上の4点を蔬菜部会に諮ることになった。

筍缶詰全国大会

日本缶詰協会主催、中部缶詰製造協会、日本農産缶詰工業組合後援による「筍缶詰全国大会」は下記の要領により開催することになった。

日 時 昭和43年3月7日(木曜日)午後1時(時間厳守のこと)

場 所 名古屋市中区区笹島町1~223

名鉄グランドホテル 電話(582)2211番

(国鉄名古屋駅並び、名鉄バスターミナルビル内、
駅より徒歩約3分)

- 議 案
1. 一般情勢報告
 2. 43年度筍缶詰生産計画に関する件
 3. 42年度需給経過、43年度需給見通しならびに輸出入状況に関する件
 4. 質 疑 応 答
 5. 次期開催地に関する件
- そ の 他

なお、議事に先立つて日本缶詰検査協会より「筍缶詰の品質」についての講演のほか議事終了後、午後5時30分より7時30分までパーティ方式による懇親会を開催。

会 費 1名に付 金2,000円也

肉表示に関する打合せ

日 時 昭和43年2月14日 10.00~12.00時

場 所 日本缶詰協会 会 議 室

議 題	1. 肉表示に関する件		
	2. その他		
主 催	日本食肉缶詰工業協同組合		
出 席			
	関東缶詰食品(株)	代表取締役	井上 有次郎 氏
	堀之内缶詰(株)	取締役社長	森山 善治郎 氏
	帝北食糧(株)	"	小泉 武雄 氏
	明治製菓(株)	食品生産部長	山下 博太郎 氏
	日東食品製造(株)	東京所長	町田 光弘 氏
	日本食肉缶詰工協組	専務理事	湖 義 愛 氏
	日本製缶協会	専務理事	阿江 伸三 氏
	日本缶詰協会	専務理事	隅野 勇 氏
	全国缶詰問屋協会	副会長(代)	中山 良助 氏
	"	食肉部会長	秋間 健次 氏
	"	食肉部会 副部会長(代)	高崎 康二 氏
	"	専務理事	北田 久雄 氏

この打合せ会は1月31日の会合で業界代表が非公式に公取委の5人委員の意向を打診する申合せになつていたところ、その後若干状況が変化して来たため一応中間報告の意味を兼ね関係団体間で再度打合せ会を開催することになつたもの。なおこの日の進行係は関東缶詰食品(株)の井上 有次郎氏が当つた。

※ 打 合 会 の 概 要

1月29日に開かれた食肉組合の理事会において肉缶詰の排除命令に関する5人委員会の議事録が話題となつたが、日缶協隅野専務理事がこのほど公取委事務局

を訪ね、その問題の議事録を閲覧したところによると大要次のように記録されていたということである。

1. 昭和42年11月1日開催の委員会。
2. 当日は有賀委員はOECD会議のためワシントン出向で不在。
3. 議案は、食品かん詰の表示に関する公正競争規約(案)の件。
4. [決議事項]

- (イ) 必要な表示事項は明瞭に表示すべきであり従つて「馬肉」と表示する。
- (ロ) 「馬肉」の表示に例外を設けることは他にもおよぶことであり、規約の効果を失う。
- (ハ) さけ、ますの品名ははつきり表示した方がよい。
- (ニ) 表示については輸入年詰も同様準用させた方がよい。

以上のような内容のものであつたといわれるが、その後排除命令について景品表示課長の伊従寛氏の説明を求めたところ、同課長は「不当表示により排除命令を出すとは言つても、それをすぐ発動する訳には行かない。排除命令となると公のものとなるので、まず市販品の調査をし、問題となる業者を呼び事情を聴取する。それから聴聞会を開き発令される」との説明があつたといわれる。

また、日本食肉任工協組の淵専務理事は、次のような経過報告を行つた。

「品名表示については今後公取委と農林省間で意見の調整を図らなければならない段階を迎え、公取委も農林省と協議しつつ検討していくという姿勢である。

いま仮りに排除命令を出す場合でも、公取委単独ではやらず農林省と相談し独走しないようにつとめるといつていた。

なお、2月16日に公正取引委員会景品表示課長伊従寛氏と農林省農林経済局消費経済課長森実孝郎氏とが直接会つて肉表示問題を中心に話合うことになつている。農林省としては農林規格を柱として業界指導をしてゆく立場にあり、この両者の会談は大いに注目されるところである。これによつて公取委が大巾に態度を変えろとは思われないが、業界は業界として守られ得る規約を考えて行きたい。」



以上のような経過により、まず業界側は2月16日の公取委、農林省の担当両課長の会談結果をまつてさらに今後の対策を検討することに意見を統一、そのためには前もつて森実消費経済課長に35年以来業界はこの問題に関し前向きで努力してきたこと、また、この業界の実状を訴え、品名、同一視野の解釈、原材料の表示場所など問題点、要望事項を具体的にまとめて同課長に斡旋依頼することになった。この要望事項は食肉組合事務局においてまとめることになっている。

農林省に対する業界要望事項

肉表示問題に関し、公取委側と農林省側の両担当課長が直接会つて両者の意見の調整を図るため、2月16日にその会談の日が予定されているが、この会談にさきかけ、去る2月14日の業界打合せ会の申合せ通り、行政指導をしてきた農林省に業界擁護の立場から公取委に説得の働きかけを要請するため、一応日本食肉缶詰工業協同組合が窓口となつて農林省へ業界側の要望事項をまとめ、2月15日、食肉缶工組の潤専務理事が、農林省農林経済局消費経済課長森実孝郎氏に進言した。要望事項のあらましは次の通りである。

1. 肉表示問題は現在まで農林省の指導によつて改善してきたものであり、この点を公取委に十分説明ありたきこと。
2. 公取委事務局では現在肉缶詰の市販品を買い集めているというが、現在出回っているものは改正以前のもが多く誤解を招き易い。
3. 不用意に新聞発表されることは慎みたいこと。品名表示で問題を取りあげても新聞発表されると品質粗悪の印象を全体に及ぼす。
4. 馬肉と表示することは消費者の購買心理に大きな影響を与え実際の消費者の消費意欲を奪うことになる。

5. 1月29日の食肉組合理事会において排除命令に事務局が言及しこのとき排除命令は「印象判断にもとづく」との説明がなされたが、この点は大いに問題がある。
6. 表示に関しては現在考えられている原材料表示の形式が業界としてはもつとも望ましい。
7. 原材料表示の方法は目下農林規格において実施中であり、公正競争規約成立後もこの表示方法が業界としては一番守り易く合理的である。
8. 規約等のなかに用いられる「品名」について公取委側の解釈と農林規格上から見た解釈とは相違点がある。これは農林規格の解釈という立場で統一すべきである。
9. 規約(案)、施行規則(案)といわれるものは現段階においては素案と見るべき筋のものである。
10. 業界は農林省經由により行動しているが、品名表示が公取委サイドにあるとはいえず常に農林省と相談のうえ指示されるよう要請したい。
11. 農林規格は年詰製造の基幹となつているものである。業界はあくまで農林省の指導を得て行動することを原則としている。

日本食肉缶工協組へ問合せの件

公正取引委員会景品表示課長伊従寛氏、農林省農林経済局消費経済課長森実孝郎氏との会談は2月16日行なわれたがその会談結果は大要次のような内容であつたと伝えられる。

1. 農林省の森実課長は業界側の要望事項を公取委の伊従課長に直接訴え、業界の実状を説明、また公正規約と農林規格等の矛盾とされるところなど追求した。

2. 森実課長は畜産局出身であり、その点業界に対する造詣が深く、「精肉」は「牛肉」を連想させる面もあるかと思われるが「肉」ということであれば問題は無いのではないか。「肉」の表示で公取委も諒承ありたいことを強く訴えたといわれる。
8. 公取委の伊従課長はその場で回答することを避け、一応委員に報告したうえで連絡すると述べた。なお同課長は「肉」で結論が得られなければ規約からこの問題をはずししばらく保留にしたいとも語つたといわれる。
しかし肉表示問題を規約から除外するといった真意は明らかでない。

関 連 産 業

※ 山本食糧工業(株) (静岡県庵原郡蒲原町社長山本幾太郎氏)は1月31日付で下記の関係会社3社を吸収合併し、

気仙沼食品(株) (宮城県気仙沼市)

由比特産缶詰(株) (静岡県庵原郡由比町)

多加羅食品(株) (静岡県清水市)

同時に、社名を

徳てい缶詰(株) (本社—静岡県庵原郡蒲原町)

に変更して、新しい体制をもつて出発した。

この記念パーティと同社富士川工場落成披露は2月8日13:00～15:00時竣工なつた富士川工場(静岡県庵原郡富士川町南松野2,500)において関係者多数を招き盛大に行なわれた。

[死 亡]

※ 山口敬次氏(日本缶詰協会顧問)2月22日午前11時4分心臓衰弱のため死去、享年66。葬儀は2月27日午後1～2時、午後2～3時告別式、妙法寺(台東区谷中町4丁目4番30)で執り行なわれた。

会 員 消 息

〔 会 社 合 併 〕

㈱大平商店と㈱岸大は2月10日を以つて合併。

〔 新社名 〕 株式会社大平商店（岸和田市沼町454番地）

代表取締役 奥 田 勝 三 氏

代表取締役 鳥 野 秀之助 氏

〔 電 話 番 号 変 更 〕

※ ㈱丸菱商店（大阪市北区此花町）の電話局番及び番号が8月1日より変更となる。

新番号 （06）（352） 0661 代 表

0663 倉 庫

伍 誌 時 報 の 申 込 み に つ い て

日本伍誌協会発行の「伍誌時報」48年度（48年4月号～49年3月号）12冊分購読ご希望の方々はたゞいま、日本伍誌協会にて申込み受付中でありまして、お知らせいたします。

なお、購読料は年間¥2,500.-（送料とも）です。

詳しくは当協会又は直接日本伍誌協会にお問合せ下さい。

